

新しい時代の女性リーダーを輩出 赤松政経塾 開講中!

2014年9月に開校した、赤松政経塾。

政治家を志す女性、企業で活躍する女性、女性活躍に関心のある人たち
約50名の受講生が毎回熱心に参加しています。

4月の統一地方選挙では、第1期生の中から

2名が立候補し、見事当選! 後に続く女性たちの活躍が待たれます。

4月12日(第5回)、5月10日(第6回)に開催された

赤松政経塾の講義をダイジェストで紹介しましょう。



▲WIN WIN 代表兼塾長の
赤松良子さん(右)

第1期生から2名が当選!
花束贈呈のサプライズ

5月10日、講義後の懇親会の開始前に、4月の統一地方選挙に当選した、花堂晴美さん、松田典子さんに、赤松塾長から花束が贈られました。「18年間、子育て支援の仕事をしてきた経験を活かし、世の中を変えていくべく頑張りたい」と花堂さん。「子どもたちが明るい未来を描ける世の中になりたい」と松田さん。若い二人のさわやかな決意に、参加者一堂、心からエールを送りました。



▲静岡県駿東郡清水町議会議員に当選した花堂晴美さん。「だれもがこの国に生まれてよかったと思える社会を作りたい」と頼もしい。



▲越谷市議会議員に当選した松田典子さんは、元シングルマザー。「生きづらい世の中を変えたい」と意欲を燃やしています。



▲「若い頃は年配の男性議員との衝突に悩んだ」と小宮山泰子さん。「男性と女性は違うのだ」と理解してから、協調の仕方を探れるようになった。

国会議員の父を持ち、父から世の中の仕組みを直伝されて育ちました。このような環境に育った恩恵を世の中に還元するのが務めだと思ったのが政治の世界に入った動機です。29歳のときに埼玉県議会議員に初当選。当時、92人中女性は一一人。平均年齢50歳でした。何も知らずに政治の世界に入り、女性であることで嫌な思いもしましたが、若気の至りで、男性に對し腹を立てることはあっても、うまく協力していく気持ちの余裕が

ありませんでした。男性を立てること、闘っても相手を最後まで叩きのめさないこと、男性と女性とは考え方が違うのだと理解した上で議論を進めることなど少しずつ学んでいきました。力のある女性が増えてきていますが、まだ東に比べて戦えるほどは増えていません。女性自身が、意識改革をし、決定権を持つことの楽しさ、それによって社会を動かせる面白さに気づき、力をつけていってほしいと思います。

4月12日 第1講義
女性たちも、決定権を持つ面白さに気づいて

小宮山泰子さん(衆議院議員)

5月10日

第1講義

男女関係なく、自分が活かせるフィールドを見つけて

丸川珠代さん(参議院議員)

テレビ朝日のアナウンサーとして14年勤務。メディアは人や社会を動かす影響力を持ちますが、アナウンサーは人の意見をいかにわかりやすく伝えるかが問われる仕事であって、自分の意見を言うことはできません。隔靴搔痒の思いがずっとありました。上司たちの後押しもあって2007年、36歳のときに参議院議員選の東京都選挙区で初当選。現在3歳の子育でと両立中です。安倍政権のもと、女性活躍推進が進んでいます

保育園を増やすだけでは足りません。女性の晩婚晩産化が進み、育児と介護を同時に背負う女性もこれから増えていきます。こうした中、女性がかつての男性並みに長時間働くことを目指すのではなく、女性も男性も、仕事も家庭も充実できるような働き方の改革が必要です。その実現に向けて、産業界に向けて地道に働きかけているところです。

政治の世界は産業界以上に男性中心社会ですが、女性だから損とは感じていません。男女関係なく、



▲女性が家庭も充実しながら活躍する社会の実現は、自分自身の問題でもある。

5月10日

第2講義

50代は美醜の分かれ目。生涯美意識のある生活を

小林照子さん(メイクアップアーティスト)

10代の頃の演劇経験から舞台メイクに興味を持ち、学校を探しましたが、美容師を養成する学校はあってもメイクアップを教えてくれる学校はありませんでした。小林コーセイが美容指導員を募集していたので、ここならメイクの勉強ができるかと思い入社。しかし、当時教えられたのは西洋の美人顔を基準にした「欠点修正法」

という技術。どの人も判で押したような同じ顔になるのはおかしいと思い、その人の個性に合わせたナチュラルメイクを勝手にやっていました。すると私の担当した地域の店舗の売上がぐんぐん伸びて、本社のマーケティング部門に抜擢され、美容研究所を立ち上げて、新商品開発にも携わりました。その後、メイクアップアーティスト

智慧のあるものが生き残ると思います。自分の持てる能力をいかに社会のニーズと一致させるか。自分が生きる術だと思います。

分が評価されるフィールドを見つけて、そこでオンリー1になることが生きる術だと思います。



▲「ひと手間の愛情を注ぐ『温冷美容』を日常の習慣に」と小林照子さん。80歳とは思えない美しさとバイタリティは驚き。

トを育てる学校の立ち上げにも携わりました。女性初の取締役を経て退職後、プロのメイクアップアーティストを育てる専門学校と、高等学校を設立し、3000人近くのメイクアップアーティストを世に送り出しています。卒業生たちがニューヨークやパリなど世界各国で活躍していたり、母校にもどって講師を務めてくれたりしています。

長くメイクの仕事をしてきて実感するのは、人は、美しくなるとハッピーな気持ちになり、内面も美しくなるということ。「見た目より中身が大事」という人もいますが、外見の美しさは心の輝きを作ります。女性の場合、ホルモンが少なくなる更年期が美醜の分かれ目です。正しいスキンケアをし、美意識を持った生活を続けることで、生涯美しくあり続けてほしいと思います。



▲懇親会では、ふだんなかなか会う機会のない、異業種、異年齢の女性たちと交流。これも赤松政経塾の大きな楽しみ。

◆第二講義

世界に羽ばたくために 今、日本に必要なこと

駐モロッコ大使時代、国際舞台でグローバルコミュニケーションを叩き込まれた広瀬さん。

日本人が世界に向けて存在感を示していくには何が必要かを聞いた。

広瀬晴子さん

【プロフィール】 東京大学文学部心理学科卒業。スタンフォード大学 OR 学科大学院 MS & Deg of Engineer 取得。人事院任用局、給与局、経済企画庁、UNESCO 人事局長、地域分権局長。UNIDO 事務局次長、在モロッコ特命全権大使を歴任。現在は東京工業大学グローバルリーダー教育院特任教授。



国際化は避けて通れない

今、急速に国際化が進んでおり、お金・モノ・人が瞬時に、自由に世界中を行き来するようになっていきます。東日本大震災でも、津波の映像は瞬時に世界中に広がりました。津波の数時間後にはモロッコの友人から「大丈夫か」と電話がかかってくるほどでした。リーマンショックのときも、その影響は世界中に広がりました。

国際化によって多様な生き方ができるようになりましたが、同時に私たちはさまざまな問題にも直面するようになりました。

たとえば TPP によって、日本の農産物や工業製品が外国製品に押されて、多くの日本企業が苦境に立たされるかもしれません。集団的自衛権が認められることにより若者が戦争に駆り出されるかもしれません。今、東京では7組に1組が、全国でも20組に1組が国際結婚をしています。また、ハーグ条約によって離婚の際のルールも複雑になりました。また、今まで日本は移民の受け入れに慎重でしたが、労働人口の減少等により、これからは移民

をもつと受け入れざるを得なくなるでしょう。宗教や歴史認識の違い、差別問題など、さまざまな移民問題から逃れることはできなくなるでしょう。

国際化は「嫌だ」と言っても避けることはできません。

これまで日本は、高い技術によって世界に確たる地位を築いてきました。また、ODA（政府開発援助）で世界有数の援助国として途上国の発展に貢献してきました。でも、技術を磨けばいい、お金だけ出せばいいという時代は終わりました。

日本人は、英語でのコミュニケーションやディベートが苦手だと言われてきました。しかしこれからは、きちんと自分の国について世界に発信することができ、自らの意見を主張しなければならぬ時代になっているのです。

国際社会の話し合いのルール

日本は空気を読む社会で、人と協調することがよしとされ、相手を論破することをあまり訓練されずに来ました。しかしこれからはそうはいきません。日本が自分の意見を主張して、世

界をリードしていかなければなりません。そのために、何が必要なのか。そのことについてお話ししたいと思います。

最初に、国際社会ではどのように「話し合いのルール」ができてきたのか歴史的に振り返ってみましょう。

発端は、戦後処理のための調整の場としての国際会議です。つまり、戦後の新しい秩序（国境線の決定、賠償金の取り決め等）をどうするかを話し合うために開催されたのです。

世界で最初の国際会議は1648年のウエストファリア条約を締結した講和会議でした。1618年から1648年の30年戦争と呼ばれる、カソリックとプロテスタントの両宗派による宗教戦争の戦後処理が行われました。このときに初めて、ネイションステイト（国民国家）という考えが生まれました。

2つ目は1815年のウィーン会議です。フランス革命とナポレオン戦争後の秩序の再構築と領土分割を目的として開催されましたが、各国の利害が対立してなかなか話し合いがまとま

●日本人と欧米人の議論の仕方

日本人	欧米人
「私」という主語を省略	「私」という主語を必ず言う
受動態で話すことが多い	能動態で話すことが多い
主張の理由を詳細に話す	主張の理由を端的に箇条書き的に話す
「Yes」「No」をはっきり言わない	「Yes」「No」をはっきり言う

らず、「会議は踊る、されど進まず」と言われました。

3つ目は1919年のベルサイユ条約とパリ会議です。ベルサイユ条約は、第一次世界大戦後、連合国とドイツの間で締結された講和条約で、パリ会議では後の国際連盟について討議されました。

4つ目は国際連盟(1918年(1945年)です。これは第一次世界大戦の教訓から発足した、史上初の国際平和機構でした。世界の平和を維持することが主目的でしたが、強制力を持たなかったため、第二次世界大戦を避けることはできませんでした。この反省に基づいて発足したのが第二次世界大戦後の国際連合で、これは今に続いています。国連の使命は、これまでのように戦後処理ではなく国際平和の維持と国際協力の実現です。加盟国は世界195カ国中の193カ国。ほぼすべての国が加盟していることになります。

欧米のルールが世界のルール

国際連盟の反省から、安全保障理事会ができ、意思決定は5カ国

の常任理事国(アメリカ・イギリス・フランス・ロシア・中国)と10の非常任理事国が行います。

常任理事国は第二次世界大戦の戦勝国であり、拒否権という強い権限を持っています。

ほかにも、世界銀行、OECD(経済協力開発機構)、WTO(世界貿易機関)など、国際機関はありますが、共通しているのは、欧米を中心とした会議運営ルール(Robert's Rules of Order)、使用言語が英語・フランス語中心であることです。総会では英仏語のほかにはスペイン語、ロシア語、アラビア語、中国語が使われますが、敗戦国である日本語、ドイツ語は入っていません。

日本と欧米は何が違うのか

私は、国際機関で働いた経験がありますが、国際会議で使用されるのは主に英語です。言葉はロジックと不可分ですから、意見を通そうと思ったら、英語で論理を組み立てて話さなければ通じません。

日本人は話し言葉の中で、しばしば「私」という主語を省略します。また端的に結論を言わず、そこに至る理由を詳細に話す。

Yes、Noをはっきり言わない。これは欧米人にとって非常に通じにくい。(上段図)

仕事の仕方、欧米と日本では大きく異なります。日本では、雇用の際に、どこからどこまでが自分の仕事を明示されることがありません。しかし、欧米では職務内容や給与等が文書化されています。ですから、文書に記載されていない仕事を頼むと「それは私の仕事ではない」ときっぱりと断られます。評価は成果主義で、プロセスよりも結果がすべてです。日本では長時間勤務をよしとする文化があります。欧米ではむしろ効率の悪い人だと思われま

す。みな、時間になるとさっさと退社してしまします。ただし、エリートは時間を気にせず非常によく働きます。

言いたいことは会議で徹底的に言う

欧米では、会議の場で徹底的に議論をしてその場で結論を出します。言いたいことは会議の場で全部吐き出してしま

す。国際的な会議での議論は、ときにつかみ合いの喧嘩になるのではと思うほど激しく、最初は驚きました。しかし、最後に議長がこの

とおり決まりましたとまとめると、双方とも何もなかったように肩をたたき合う。そして、一度決まったことは記録に残し、次の会議で蒸し返しません。日本人は、言いたいことがあっても言えなくて、会議が終わってから蒸し返したりする。しかし、会議の場で主張できなければ何の意味もありません。

また、ふだん意見をあまり言わないのに、急にアグレッシブに意見を通そうとしてもこれまた通りません。日頃からさまざまな場で発信しておくことが必要です。

私が駐モロッコ大使として現地勤務していたときに、国際捕鯨委員会で調査捕鯨が問題になったことがありました。私は日本の立場として調査捕鯨で鯨を捕ることをモロッコに支持してくれるように働きかけをしなければならませんでした。こういうことは、会議の席でいきなり主張しても通りません。日頃からロビー活動をしたり、他国の方々と信頼関係を作っておいたりすることが非常に大事です。持ちつ持たれつではありませんが、「あのとき日本にはよくしてもらったから」と、助けていただくことも多々ありました。

日本人はなぜ議論に勝てないのか

日本人は、何か言うときに「I think」から始める人が多いですが、それは自信がなさそうに聞こえます。また、「前向きに対処します」をそのまま英語にして言うと、日本人には「No」だとわかりますが、欧米人には「Yes」と誤解される。欧米人は「Yes」「No」をはっきり言うのが当たり前ですが、日本人は慣れていないので面と向かって「No」と言われると萎縮して、主張を引つめてしまう傾向があります。

これらのことから、日本人が国際社会で議論に勝つのはとても難しいのです。

どうして日本人はこんなに議論に勝てないのでしょうか。考えてみれば、私たちは子どもの頃から「先生の言うことよく聞きなさい」としつけられてきました。しかし、国際社会では、相手の言うことよく聞いていたら、言葉を差し挟む余地がありません。発言の機会を得られないまま負けてしまいます。

勝つためには相手を自分の土俵に連れてくる

最初は私も、隣のイギリス人が

言う意見は通るのに、なぜ私の意見は通らないのだろうと悩んだものです。しかし、議論に勝つには語学力ではなく、自信と迫力だろ

う。あるフランス人と議論をしたとき、相手が「英語ではなく、フランス語で話してもいいか」と言いました。母国語で話したほうが、言い

たいことが言えると思ったのでしよう。私は「では、私は日本語で話していいですか」と答えました。実は「英語で話していいですか」というところを間違えて「日本語」と言ってしまったのです。すると相手のフランス人は「わかったわかったじゃあ英語で話すよ」と、フランス語で話すことをあきらめました。単なる言い間違いだったのですが、後で考えるとこれはいい戦略でした。

「喧嘩に勝つためには、相手の土俵に乗るのではなく、こっちの土俵に相手を連れてくること」それがこのときの教訓でした。

契約の大切さを理解する

日本が海外で自分の主張を通していくにはコミュニケーション力を磨くことが何より大事です。相手との思考方法の違いを理解し

て、相手にいかに伝えるかを考えることです。

人間同士だから、信頼関係を構築することが大事ですが、いくら相手を信頼しても、向こうは契約社会です。ビジネスのときには契約書を一字一句きちんと読んで確認すること。日本企業が海外でビジネスをするときに、話がこじれて裁判沙汰になることがよくありますが、たいていは日本が負けています。相手を簡単に信用してしまつて、細かなことまで契約書に明記していなかったためにトラブルになるようです。

日本の良さを武器にする

ネガティブなことばかりではありません。日本人には日本人の良さがあります。たとえば、約束を守る、正直である、相手のことを思いやるといったことは日本人の良さです。それは、国際社会から信頼される美点です。それを武器にするべきです。

新しいルールを作るのは女性たち

第二次世界大戦が終わって、70年が経ちました。今の世界のルールは、国際連合によって作られましたが、さすがに金属疲労が出て

きています。アラブ諸国の紛争問題をしても明らかに、欧米の先進国主導のルールがうまく機能しなくなりつつあるのです。

今、中国がアジアインフラ投資銀行(AIIB)を作ろうとしているのも、欧米主導のルールにNoを突き付け、アジア主導の新しいルールを作ろうという動きにほかなりません。

これからは、先進国だけでなく、色々な国の考え方を尊重したルールが必要だと私は思います。日本は、世界のGDPランキングで中国に追い抜かれたとはいえ、経済大国として世界から信頼されています。まだまだ簡単にマジナライズ(過小評価)される心配はないと思います。でも、いつまでも現状に甘んじていたら、この先どうなるかわかりません。

今は変化の時代ですが、だからこそチャンス時代です。世界の新しい秩序を作り、アジアのリーダーとなるべく日本には頑張ってもらいたい。これやってくれるのは既成勢力ではなく女性だと信じています。ぜひ今日ご参加の皆さんの中から、世界に羽ばたいていただきたいと思います。

赤松政経塾 参加者の声



政治を志す
女性たちを
応援したい

総合職勤務

佐藤陽子さん

総合職として働いています。赤松先生が雇用機会均等法を作ってくれたから今の私があるのかも。役所に出向したときに女性議員がとても少ないことを知り、政治の世界は企業以上に女性の活躍が遅れていると驚きました。赤松政経塾には、政治家を目指す女性も参加されています。彼女たちを応援する形で私も政治に関わりたと思います。毎回の講義は講師が多彩で、仕事だけでは知ることのなかった分野を学ぶことができ、とても有意義です。

女性を
ただ増やすだけ
ではいけない

環境系勤務

三岡美樹さん



「雇用機会均等法元年」に就職。結婚出産を経て同じ会社で30年近く働き続けています。女性の3割がワーキングマザー。管理職の女性も多く、昨年同期の女性が初の役員に。恵まれた職場ですが、他の多くの企業や政治の場ではまだまだ大半が男性。意思決定の場には女性の視点も必要だと思います。しかし、単に女性を増やすだけでなく、女性側にも交渉力や協調性、説得力などトレーニングが必要。ここで学んだことを社内にも伝え活かしたいと思っています。



人とのつながりが
塾生の力に
なっていく

学習院大学 法学部 政治学科 教授

庄司香さん

専門はアメリカ政治。予備選挙制度の歴史的起源を研究するうちに、政党による候補者公認や人材発掘・育成に関心を持つように。日本の政党による候補者公募についても調べ始め、赤松政経塾のような無党派政治スクールがあることを知りました。塾生同士のネットワークキングを重視しているのが同塾の特徴であり魅力。人とのつながりが塾生たちの力になっていく過程と一緒にリアルタイムで実体験でき、本当に貴重な体験をさせていただいています。

トップランナーの
問題意識に
触れられる

リサーチ会社勤務 SRI アナリスト

柴田由布子さん



赤松政経塾では、歴史のページとなるような第一線の方々にお会いでき、非常に光栄です。現在は、社会的側面から企業の調査・評価・格付けの仕事を行っています。各分野のトップランナーの方々が、日本が今後直面する課題についてどのような問題意識を持っているかを聞けることは、大変刺激になり、仕事に役立っています。ふだん会うことのないジャンルで活躍する受講生たちとの交流にもインスパイアされています。